

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.144
2015.9.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— E.S.モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

● 第5回 ● 土器片研究の指導方針・その1

近代日本考古学における人工遺物、とりわけ土器片の研究は坪井正五郎により西ヶ原貝塚で「指導方針を建てられた」と明言する山内清男の学史評価に学ぶならば、確かに土器型式の内部構造を導出する基礎的分析法と加曾利B1式前後の形態学的実践法が展開される。

西ヶ原貝塚では破片が大部分を占め、「完全物」(小型無文の猪口形・盃形)2個、「殆ど完全物」(椀形)1個、「大体の形分かるもの」4個に過ぎず、大森貝塚のように装飾・形態の全体が分かる特徴ある例に乏しい。破片では既に触れた特徴ある形態の把手15片、注口部6片は類例の追及とその背景説明が最初に議論されたが、接合後の土器片総数は1,811片(口縁部311片、体部1,342片、底部158片)にのぼり、ここからの

分析が坪井正五郎の腕の見せ所となる。

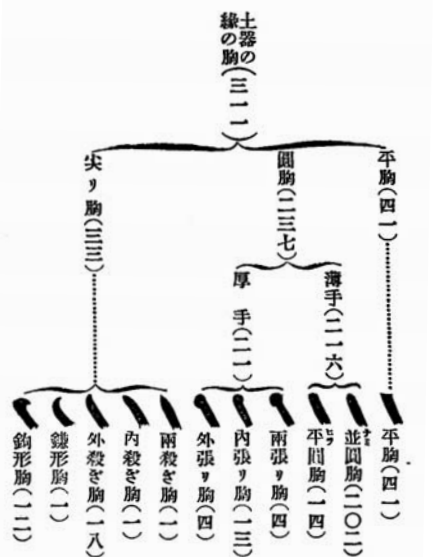
学史的に著名なのは底部158片の底面分類と底面圧痕を「復元する」基礎的研究である。石膏を用いた「復元押し形」を作成し、特に編物圧痕では「形式図」によるパタン解明が高く評価され続けており、同様に木葉痕を「復元する」方法も植物の種類と季節を同定する基礎として継承されている。

口縁部311片は縁の縦断面形(「胸」:第7図)、外面口縁装飾(「外部縁飾り」:第8図)、内面口縁装飾(「内部縁飾り」:第9図)、口唇部装飾(「上部縁飾り」:第10図)に形態と装飾を分類した上で、分類単位に百分率の比例を導出し、外面口縁と内面口縁の間に見られる統計的關係にも迫るなど、多角的な分析が試みられる。即ち、分類が目的なのではなく、

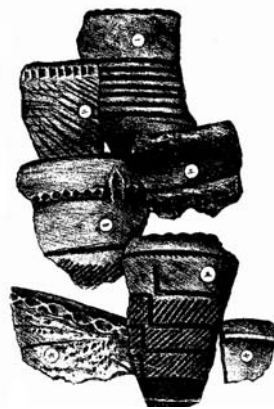
分類から何が言えるか、を考察することに重きが置かれるのである。

第7図を見れば、口縁部断面は薄手で丸い形態が主流で、次いで平坦な形態が続く、両者で8割弱を占めることが一目瞭然である。蛇足ながら、厚手で丸い形態の21片は今日の安行1式であるが、堀之内2式～加曾利B1式と安行1式が断面形態のみで見事に分類され、外面装飾の分類と相互に検証可能な今日的精度には唯々恐れ入るほかない。

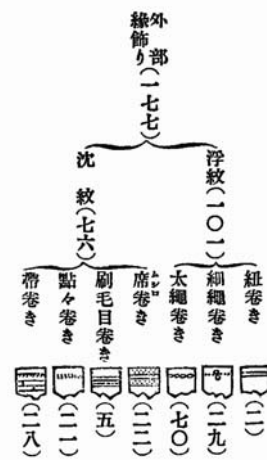
第8図の外面口縁装飾177片(無装飾は134片)は体部装飾(後述)と共通する縄紋や沈線文などが除かれ、口縁部に独立して配される装飾に限定され、「浮紋」(細別として「紐巻き」「細縄巻き」「太縄巻き」と「沈紋」(細別として「席(ムシロ)巻き」「刷毛目巻き」「點々巻き」「帯巻き」)の2大別7細別に分類し、併せて分類別の算出と集計が図られる。「浮紋」の「紐」は平滑な隆線、「縄」は押圧隆線であり、「席」は縄紋施文、「刷毛目」は多条細線、「點々」は刻文、「帯」は横帯文であることが標本図から判明する。今日では「席巻き」は安行1式精製土器、「點々巻き」は安行1式粗製土器の典型であり、他が堀之内2式～加曾利B1式の精製土器と粗製土器である。



▲第7図 西ヶ原貝塚の「土器の縁の胸」



▲第8図 西ヶ原貝塚の「外部縁飾り」分類と標本図



※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

目次

- 加曾利B式土器 土器片研究の指導方針・その1(第5回) 鈴木正博 …1
- 考古学の履歴書 良き師・良き友に恵まれて(第23回) 渡辺 誠 …2

- リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第137回) 須賀井新人 …2
- 考古学者の書棚 『板付・市営住宅建設に伴う発掘調査報告書 1971～1974』 小山岳夫 …4

考古学の履歴書

良き師・良き友に恵まれて(第23回)

渡辺 誠

30. 瓦の文化史

私の物質文化史路線による研究において、瓦の文化史は重要なかつ面白いテーマであった。縄文文化の研究に焦点を定め、脇目もふらなかつたはずであるが、若き日に身体に染みついた感覚は簡単には消えなかつた。

高校2年の時、私の素行に心痛めた母は、遠い親戚の瓦屋へバイトに行かせた。朝6時40分の列車に乗り、二つ先の四倉へ行き、帰りは5時には帰れたが、家に戻った時はクタクタで夜遊びどころではなかつた。母の作戦勝ちである。そしてこのことはここまでの話であつたはずであつた。

しかし勤めた関西は、縄文よりも新しい時代の研究が盛んであり、瓦に関しても見聞きすることが多かつた。特に平安博物館の、隣の研究室は平安京の研究室であり、瓦の研究も盛んであつた。そして私には無縁であつたが、当時高校教員で、よく博物館に見えていた江谷 寛先生が、ご自分の車で、関西に不案内な私をあちこち案内して下さいました。私が気を使わないように、縄文土器と瓦を見ることができれば、どこでも連れて行くと言って下さいました。また同先生の先生は、瓦の神様ともよばれていた木村捷二郎先生で、時々来館された時には、いろいろとお話を聞かせて頂いた。これでは高校生の時の記憶が消えるはずがない。

しかし他の方々のお話を聞いていると、屋根の上ののせられる瓦について、よく分かつていないのではないかと思うことが多くなつてきた。一番軒先の文様についてのみ調べて、制作年代を論じているだけで、その後につづく平瓦は無視に近い。まるで縄文土器の偏った研究と同じではないかと思つた。瓦の種類・枚数や比率は、建物の種類・規模や格式を復元する上での重要資料ではないかと思つたのである。そしてもっともシンプルな例として、実際軒先にしか瓦は見られず、奥は檜皮葺きと言う西園寺公望公の屋敷を、京都嵯峨野散策の折に見たこともある。

こうした不満を解消して下さいましたのは、先に記した近畿民具学会の先生方であつた。小谷方明・岩井宏美先生は、多分湖岸を歩いていた例会の時であつたと思うが、湖北と湖南では、坪当たりの瓦の枚数が違うのだと言われた。前者はゴンロク

(五六)、後者ではシチニ(七二)の瓦とよばれ、雪の多い地方ではやや厚くて少し大きいとのことであつた。この枚数をさらに少なくすれば六七42枚となり、古代の1尺幅の瓦が示唆される。

そして文化財の瓦を復元制作している奈良市内の業者「瓦宇」へも連れて行って下さいました。ここの工房はまるで瓦の博物館であつた。また会長さんはなんでも親切に教えて下さいました。私は何度も足を運び、乾いた頭に注がれてくる慈雨のように、沢山のことを吸収させて頂いた。まず単純なことから伺つた。元の古い瓦と同じ大きさに作るために、どの位の縮みを見込むかということである。これに対しては、丸いものは16%、平たいものは18%増しに型を作るとのことであつた。そして各地の有名な城の木型がぎっしりと詰まって並べられていたのは、圧巻であつた。

ところが沖縄へ行くと、瓦は小さく坪200枚はのるといふ。色もきれいで、オレンジ色した屋根が、澄み切った青い空に映えていた。沖縄では、復元された首里の正殿の瓦を葺いた奥原瓦で取材させて頂いた。

ここでも驚かされたのは、古代に桶巻き技法が本当にあつたのか、ということである。桶状のものに、粘土板を貼り付け、ある程度乾いたら簡単にはがれると思つているらしい。しかし奥原瓦で拝見した桶状のものは、幅数センチの板を紐で連ねていて、それを叩いて崩す。したがって一番下にはその紐の痕跡がはっきりと残ってくる。しかし古代瓦でこんな紐の痕跡はまったくみられない。私の疑問は膨れるばかりである。

略歴

昭和13年11月18日 福島県平市大町(現いわき市)に生まれる
 昭和32年3月 福島県立磐城高校卒業
 昭和33年4月 慶應義塾大学文学部入学
 昭和43年3月 同上大学院博士課程修了
 昭和43年4月 古代学協会平安博物館勤務
 昭和54年8月 名古屋大学文学部助教授
 平成元年4月 同上教授
 平成14年3月 同上定年退職、同上名誉教授
 平成15年4月 山梨県立考古博物館々長・同埋文センター所長(18年3月まで)
 平成18年7月 日本考古学協会副会長(平成22年5月まで)

隔月連載です。次回岡田淳子先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイスバレット・サイト 137

今塚遺跡 ～ 山形県山形市

須賀井 新人

財団法人山形県埋蔵文化財センターが創設されたのは1993年であり、かれこれ22年前になるが、この年に担当したのが今塚遺跡である。調査原因は山形県住宅供給公社による宅地造成及び分譲住宅建設であり、当時は山形市北部の水田地帯であつた一画が、現在では一大新興住宅街を形

成している。遺跡は古墳時代前期と平安時代前期の集落跡であり、約800m南西には、古墳時代後期の農耕集落として著名な国指定史跡の「嶋遺跡」がある。遺跡付近は扇状地の前縁部に位置しており、低湿地への立地である。このため、嶋遺跡では木製品の遺存が良好で、生活用品・生産用具・

武器といった多種多様な遺物が出土している。

90年代は開発事業に伴う発掘調査が全国的にピークを迎えた時期であり、当財団の事業量もこれに違わず、調査費用や職員数が最大となった時期であった。今塚遺跡の調査面積は14,200㎡あり、これを調査員2名体制で5月～11月までの半年間で調査するという、発掘件数が減少の一途を辿る昨今においては考え難いほど切迫した当時の状況であった。

対象域を2分割して調査したところ、前半部からは西流する旧河道の主に左岸において平安時代の掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、溝跡、畝状遺構などを確認した。遺構数は面積比にして少なく、その分布は比較的緩慢であったので、河道を含めた掘り下げは順調に推移していくかに思えたが…。溝跡や河川跡から9世紀中頃の墨書土器が多く出土し、計3点の木簡も出土した。1条の溝跡では特定の範囲から折り重なって集中的に出土した。登録した遺物は164個体を数え、一括出土状況から祭祀的な様相が窺い知れた。また、旧河道の右岸で検出した小穴を掘り下げたところ、本来の底面の下から古式土師器が出土したことから、その周辺は文化層が2面存在することが判明した。上面の記録後に面的に掘り下げ、完形土器が多く遺存する古墳時代の竪穴住居跡1棟を検出した。

図面・写真等の記録作業に追われながらも何とか掘り終えて、折り返し後半部分の調査に入ったところ、旧河道の右岸において古墳時代の竪穴住居跡30棟、左岸では平安時代の掘立柱建物跡4棟ほかの遺構が検出された。竪穴住居跡のうち7棟は焼失家屋であり、良好な遺存状況のもと床面や貯蔵穴において多くの完形品が認められた。遺構数の多さから調査期間の延長も考慮されたが、財団創設の年であり、期限内に完了して事業者の信頼を得ることに重点が置かれたため、期間後半はかなりのハイペースで調査せざるを得なかった。時期的に日暮れが早いので、朝方早出して土層断面の線引きや写真撮影を行う日もあった。

期間終盤の調査説明会開催にあたり、木簡や墨書土器の文字資料の解説を、国立歴史民俗博物館の平川南先生へ依



▲調査区(後半部)全景

頼した。木簡1点には年号が記されており、当時山形県内では2例目の発見であった。説明会の数日前、先生から自宅へ突然電話があり「今、盛岡へ来ているのだが、確認のためもう一度木簡を見に明日山形へ寄る」というほど、発表の前に念を入れて対応いただいた。

時間的制約から旧河道は一部の調査に止まり、遺構の検証も十分ではなかったが、当初の計画どおりで現地調査を終了させた。当時はまだ単年度内で報告書まで刊行する事業契約が多くあり、当遺跡も例外ではなかったため、調査終了後の約4か月間で100箱に及んだ遺物整理や、報告書の原稿作成を行うハードスケジュールを強いられた。竪穴住居跡等から多量に出土した古式土師器は、山形県内でまとまった資料が少なかったことから、当該期の指標となるような重要な存在となった。また9世紀の出土遺物を整理していく中で、人面墨描の坏が接合でより明確になり、木簡や墨書土器の文字資料を集成した。2月に行われたその年の『古代城柵官衙遺跡検討会』の折、平川先生へこれらの資料を持参したところ、墨書文字に国司への貢ぎ物を取り扱う「調所」が含まれていたことが判明した。先生曰く「こんなものがあるのだったら、全部見なきゃダメだな。文字があるものは現物をみんな持って佐倉(歴博)へ来い」ということになって、整理箱3箱分の出土品を車へ積んで千葉まで往復したのが思い出される。



▲人面墨描土器

時間に追われながらも、報告書には可能な限り遺物実測図を掲載したが、事実関係の報告のみになってしまった感は否めない。4世紀古墳時代の集落跡については、その後に東北中央自動車道建設をはじめとする各開発事業を原因として、周辺各地の発掘調査で発見例が相次ぎ、資料の蓄積もかなり充実していった。一方、9世紀平安時代の成果では、年紀木簡(853年)の出土により相伴土器の年代が特定され、これまでは形態変化を基に推定していた編年に確実な根拠を与えられた意義は大きい。また、木簡や墨書土器の一括出土、調所のほか文書作成に関する「書生」の文字資料等々から考察して、役所的な機能を有した公的施設の存在が推測されたが、検出された建物跡の規模や配置を見る限り、遺物の内容に見合うだけの様相は察知されなかった。ただ、溝跡に一括廃棄された墨書土器に記された「生」や「麗」の文字と、陰陽師の祈祷風景を描写したと思われる人面墨描土器から、水辺を利用した祓いの状況が窺われ、当該期の出羽国で続発した飢饉や地震に対する律令祭祀の事例であったとすれば興味深い。

※次回のマイ・フェイスバレット・サイトは草野潤平さんです。

考古学者の書棚

「板付—市営住宅建設に伴う発掘調査報告書 1971～1974」

福岡市教育委員会

小山 岳夫

標記の発掘調査報告書は、昭和54（1978）年、19歳の私が拙くも弥生時代研究を志した初期に購入した書籍である。

当時（今でもそうなのだろうが…）、神田神保町の慶文堂書店には考古学研究者垂涎の有名遺跡の発掘調査報告書等がたくさん陳列されていた。板付遺跡、瓜郷遺跡、日本農耕文化の生成など弥生時代研究を志す者なら誰でも欲しがる書籍が取り揃えられていた。

極めて漠然と水稻耕作の始まりに興味を持っていた私にとって、九州北部の初期水田の関連遺構・遺物が載っている福岡県板付遺跡の報告書はあこがれの存在であり、慶文堂で本書を発見して以降、どうしても欲しくなりました。とはいえ、究極の貧乏学生であった私にとっては極めて高価な本、何度か神田通いして逡巡した挙句、38,000円という大枚をはたいて本書を購入した。代金を支払う手が震えていたのを今でも覚えている。

その後はしばらく病にかかったような状態になり、神田通いが続いた。長野県関係では海戸・安源寺、海戸2次、生仁、北原遺跡など立て続けに購入した。海戸・安源寺は6,000円であった。購入の都度、財布の中は電車賃を残す程度になった。当然、生活は困窮を極め、米だけを食べる日が続いたが、神田通いは辞められなかった。

今、これらの本のページをめくってみると赤ペンのアンダーラインや汚い字の書きこみがところどころにみられる。勉強しようという意志は、一応あったようだ。しかし、この努力が研究成果として文章化されることはなかった。当時の私は、研究テーマを絞り込めていなかったため、漠然と全部を読もうと試み、結局は挫折してしまっていたからである。

閑話休題 学生時代のある日、堤 隆氏が私の下宿を訪ねてきた。神田へ行って「原史学序論を買うのだ」という。とりあえず一杯ということになり、結局一晩中飲んでしまい、本を買うお金も使わせてしまった。ひどいことをした思い出の一つである。

大学卒業後、私は長野県佐久地方で20年間埋蔵文化財発掘調査を担当することができた。その間、同じ研究目的や価値観をもつ多くの仲間を得る事が出来、その仲間たちから報

告書をいただけるようになった。20年間で私の考古学関係の蔵書は飛躍的に増大した。が、この段階でも寄贈していただいた報告書を活用する機会は少なかった。自分の発掘した遺跡の取りまとめに拘泥してしまい、他地域の報告書をじっくりと読む精神的余裕がなかったためである。おのずと私の研究テーマは佐久地方に限定されたものになった。

高価な報告書を買った若き日の投資、そして他地域の仲間からいただいた多くの発掘調査報告書は、全く無駄であったのか？決してそうではない。

転機が訪れたのは、つい最近のことである。本誌『アルカ通信』に桐原健先生の回顧録が掲載されていた。学友の一人（茨城県の）井上義安氏は「十王台オンリー」とあり、この一文に私は反応した。

「これからは、視野を広げなければいけない。」

今、私は長野県の弥生～古墳時代前期の遺跡動態を把握しようと考え、県内各地域を訪ね歩き、研究者の意見を聞き、遺跡立地のあり方を把握しようとしている。

調査の事前勉強で威力を発揮しているのが、若き日に買い漁った高価な報告書、発掘調査技師時代に仲間からいただいた多くの報告書である。今になって、これらの本を寝床の周りに積み上げ、必死になって読み込んでいる。

県域全体の遺跡動態を観察し、巨視的にとらえることによって新たな歴史事象が見えてきた。将来的には、この取り組みをさらに広い地域に拡大し、板付遺跡の報告書も38,000円に見合った活用をしたいと考えている。

幸いなことに私は何度かの挫折を繰り返しながら、考古学を続けている。私の無意味に本を収集する癖が、この齢になって役立つ奇譚を紹介して、本稿を閉じることにしたい。



アルカ通信 No.144

発行日 2015年9月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行所 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp